家　庭　訪　問

ヤン・スィンゲドー
（昭和45年修士修了）

京都での会議の後，兵庫県尼崎市の先生の実家にお連れいただいたのは，十数年前のことである。そのとき，先生のご母堂からとても手厚い持て成しを受けたが，息子の弟子たちのうちの「外国人」が訪れてきたということはやはり特別な出来事のようであった。ビールがいいか，日本酒がいいか，つまり何が口に合うのか，ご母堂は――当然のことながら――多少戸惑いの様子であったことを今もなお覚えている。

そのためだけの恩返しではなかったが，先生をいつか私の郷里にお連れしたいという願望が叶ったのは，そのずっと後であった。1981年の夏，スイスで国際宗教社会学会の大会が開催され，真面目な仕事の前にベルギーのフランダース地方の田

園風景の醍醐味を味わっていただくための絶好の機会となった。私の母に「恩師の柳川先生がいらっしゃる」と告げたとき，母はやはり戸惑ってしまい，何が口に合うのかということが一番の心配事であった。私は，「先生は絶対水をお飲みにならない」と言って，この心配をいくらか取り除くことに成功したのではあるが，実際にいらっしゃるまで落ち着かなかったのが実状であった。

「儀礼の構造」に属するかのように，先生がブリュッセルの飛行場にお着きになった瞬間から私は母との出会いの準備に入った。朝日が上ってきたばかりではあったが，「小便小僧」のあれがやはり小さすぎるとの幻滅の悲哀を紛らわせるために，ベルギーの首都自慢のグューズ・ビールを一献に及び，このペースで続ければ，家に行っても日本の祭り精神とフランダースの祭り精神との完全なドッキングは必らずや行なわれるであろうと，私は安心を覚えはじめた。そして昼頃，私の郷里に着いたとき，最初の挨拶から母の戸惑いも，太陽を曇らす雲がいきなり切れたかのように雲散し，「外国の先生」が，日本からのあるお客様と違って，水を飲ませてほしいなどと要求しなかったので，母は満足そのものであった。

午後は，近くのブルージュへ案内させていただき，私は先生のお疲れの様子を見て少し心配になった。レストランでのムル貝の御馳走はやはり先生の口にあまり合わないようであった。（そのせいか，日本から一諸にいらっしゃった友人は余計に召し上がった。）家に帰ったのは夜遅く，時差ぼけも酷かったので，すぐお休みになったら，と思ったが，先生は「もう少し」と仰しゃった。母は直感でわかった。「もう少し」って，「ヤンが日本から持ってきたものを指しておられるのではないか」と思い，地下室に保存されていた日本酒の瓶を恭しく差し出した。先生は私の方へ目を向け，「優」の成績を与えるような感じでうなずかれた。

外国で日本酒を飲むと，あまりいい味はしない。雰囲気が違うからであろう。家の居間でソフトな椅子に坐わって杯のやりとりをするのはどうもおかしいと，先生も感じられたに相違ない。しかし，解決の方法はあった。間もなく先生は椅子から腰を移し，床のじゅうたんの上に坐わられた。そして将棋倒しのように皆，次々とその模範に従った。それを見た母は，最初は不安な顔付をしていた。休暇で郷里へ帰ってきていた私も，日本の生活に慣れたせいか，床に坐わったことが前にあった。そのとき母は，「それは大人の坐わり方ではない」と，私を叱ったのである。しかし，今は，外国からいらっしゃった偉い先生がそれをなさると……。

「郷に入っては郷に従え」という諺がある。柳川先生はこの原理をみごとに破られたのである。しかし，だれもそれを気にしなかった。いや，皆はむしろ，先生は郷に従わなかったからこそ郷に入ったのではないか，という感じを持ったのである。床に坐わって日本酒を飲んでおられる先生の姿を見て，私も，そしてそこに居合わせた日本の友人も，「さすがに柳川先生だなあ」と考えた。母や私の兄弟もまた，最初の驚きを押えてこの外国での日本的な直会の儀式に心から参加した。先生を中心にその夜一種の国際的共同体が誕生し，その実際の存在はとても短かかったものの，私の家族の者の内に「神話化」した思い出として生き残っている。

私は柳川先生の御指導の下に日本文化の様々な側面を知り，それを直接に味わうことができた。いくら郷に従おうと思ったとしても，自分のルーツを絶対忘れてはならないということは，その中から得た教訓の一つである。柳川先生の研究活動，いや，先生の人生のすべてはルーツの探求にほかならないことがわかったような気がする。それに国境はないことを，以上述べた「家庭訪問」のエピソードはみごとに例証しているのではないだろうか。